

KONAN UNIVERSITY

心理療法における言葉をめぐって 共同研究プロジェクト 心理療法の現在に関する検証 「"若手臨床家の事例の読み方"に関する調査」より

| | |
|-----|---|
| 著者 | 長野 真奈 |
| 雑誌名 | 心の危機と臨床の知 |
| 巻 | 12 |
| ページ | 133-142 |
| 発行年 | 2011-02-28 |
| URL | http://doi.org/10.14990/00002716 |

心理療法における言葉をめぐって

共同研究プロジェクト

心理療法の現在に関する検証

「若手臨床家の事例の読み方」に関する調査」より

長野 真奈

心理療法においての言葉を考える際、まずクライアントが心に抱えている未解決の問題が、言語化を通して解消されるという文脈での言葉を思い浮かべる人は少なくないのではないだろうか。しかし、当然のことながらそれ以外にも心理療法において言葉は機能している。この点、「言語はかつて『思想を表現し伝達する手段』であるように考えられていたが、現在では言語の機能はもっと重く見られるようになってきた」と河合（1）が述べていることは示唆的である。本論では、クライアントによって言語化される際の発話される言葉だけでなく、セラピストの言葉、描画、夢、箱庭などの非言語表現を理解する時の言葉を読みとく際の切り口になるような、事例の読み方に通底す

る言葉とはどのようなものかについて考察すべく、言葉のメタファ機能に注目する。これは、何をもって心理療法とされているかという問いに答えられた注目点である。

本論では、はじめに、テーマの発端となった調査研究の概要を紹介し、次に、心理療法における言葉の機能に関しての先行研究より、メタファについて述べられているものを三つ概観する。心理療法における言葉をメタファとして理解する視点については、これまで少なからず論じられてきており、言葉理解の定石の一つとなっているようだ。ただ、ではそれは何のメタファなのか、もしくはどのような働きをしているのかという点については、論者によって異なるがある。心理療法におけるメタファ論を事例の読み方の一つとして捉え（以下「メタファ理解」として、修辭学的な「メタファ」と区別する）、その共通点と相違点を眺めることで、筆者が調査研究過程において注目していた、事例の読み方に通底する言葉とはどのようなものであったかを浮かび上がらせる。それは、「探索的に言葉を見出す動的な姿勢」、「弁証法的に止揚された言葉を探す姿勢」であり、又、その姿勢の結果見い出される言葉だと筆者は考えている。

共同プロジェクト「心理療法の現在に関する検証」

甲南大学人間科学研究共同研究プロジェクト「心理療法の現在に関する検証」は、二〇〇九年六月に「若手臨床家の事例の読み方」に関する調査を行った。調査では、公刊されているある事例が提示され、調査協力者である若手臨床家三〇名に、事例の読みに関する質問に回答いただいた。そしてその結果整理をすることで、若手臨床家の事例の読みの視点を抽出した。

提示された事例では、多層的とも多次元的とも言える展開、つまり、セラピストとクライエントのやりとりの中に、描画や夢、箱庭などが多く登場し、それと並行してクライエントの身体症状や、クライエントを囲む環境への対応などのいわゆる現実状況が報告された。調査協力者である若手臨床家とは、臨床心理士資格取得後五年から十年を経ている、資格更新を一度済ませた臨床心理士である。この世代に限ったものには、主に二つの理由があった。一つは、調査協力者を三〇名確保する為に、臨床心理士資格合格者総数が一定以上あるという意味で集めやすい世代であったこと。もう一つは、指定校共通の制度の基で教育を受け、資格を取得した後、必要とされる研修を受け一度目の資格更新の基準を満たした世代であることである。

調査結果は心理臨床学会第二九回秋季大会にて発表⁽²⁾され

たが、今回の調査は結果整理だけでなく、調査に至るまでの過程にも研究メンバーの研修の意義があった。中間報告書では、今回の研究は、研究メンバーと調査協力者が相手の考えや気持ちを相互的に推察しあう、相即的な研究だと位置づけられている⁽³⁾。研究メンバーの一人として、調査研究過程、特に言葉に関する先行研究から学んだことを本稿にまとめることは、相即的事例研究の一端を報告するという意義もあろう。そこで、質問紙作成の過程で重ねられたグループでの討議を通して、筆者が抱いた疑問をもとに、事例の読み方に通底する言葉理解の多様性と共通点について考えたい。質問紙作成の経緯は次の通りである。

調査で提示された事例は、研究メンバーらによって事前に読み込まれた。そして、そこで抱かれた関心や疑問によって研究メンバーは四グループ⁽¹⁾①ことば②技法③身体化・行動化④現実状況に分けられた。質問は、この四グループの疑問を調査協力者に問うものである。筆者はそのうち、ことばグループ⁽⁴⁾に属していた。

ことばグループの作成した質問は、初めに述べたように、一般的に言語化の意味で用いられる言葉とは異なる、若手臨床家の事例の読み方に通底する言葉を抽出するという目的で作成された。この目的は、質問作成の早い段階で合意が得られた。が、グループメンバー各々が抱く通底する言葉に対する理解は一致

しないことが、話し合いを重ねる中で明らかになった。例えばクライエントの言葉、セラピストの言葉、描画や夢などのいわゆる非言語表現をやりとりし理解する時の言葉、沈黙という語られない言葉、ケースのテーマという言葉、言葉そのものを対象にした場合どの層で語られている言葉なのか等々、何を手掛かりにするかによって言葉の捉え方が違ってくるからだ。一つ明確だったのは、我々が求めていたのは、事例の読みを旧知の概念に収めるような言葉ではなかったということである。そこで、メンバー間の不一致を一つの事実として受け止め、それを包括する問いをたてることとなる。それは、現在の若手臨床家は、何をもって心理臨床としていいのかという専門性を知りたいう、という初めの問いに戻ることもあった。最終的に質問は、「この事例はどのように展開したと考えますか。あなたの考えをお書き下さい」となる。ここでグループ名が「ことば」とひらがなになっているのは、その方がしっくりくるという雰囲気があったということなのであるが、今振り返ると、グループ内での様々な言葉理解を念頭におきながら、新たな知見を調査結果から読み取るうとする試みの現れであったのではないかと思う。

次章以降では、言葉の機能の内、メタファに関する先行研究をいくつか紹介し、筆者がことばグループで経験した、言葉理解のメンバー間での不一致、もしくは多様性が、どのような理

由で生じていたのかを考えたい。そして、その多様性の中に共通点をさがし、事例の読み方に通底する言葉を考える。

心理療法における言葉をメタファとして

理解することについて

メタファ (metaphor) とは、隠喩とか暗喩と訳される比喩の一種であり、直喩とか明喩 (simile) と言われるものや、換喩 (metonymy) と言われるものとは区別される⁽⁵⁾。主に修辞学の学問分野で用いられる用語である。

例をあげると、

一、人生は旅だ (暗喩・メタファ)

二、雪のように白いうさぎ (直喩・シミリー)

三、永田町Ⅱ国会 (換喩・メトノミー)

メタファは、例一のように、人生が旅に例えられてはいるが、例二のシミリーのように、「うさぎのように」などと、例えを明示する語を欠いた比喩表現である。メトノミーは、例三のように、密接に関係のあるもので、言い換える比喩である。メタファは、伝統的には、言葉で表現する際の比喩という技法の内の一つとして、その役割や効果について論じられてきている。その理解は変遷しており、現代では、人間の認知の仕方の一つとしても考えられているようだ⁽⁶⁾。心理療法における言葉と関連付け

て論じられるときは、その機能として、AはBである、AはCであるといったように、異なるものを関連付けること、異なるものをつなげることが強調される。

メタファだけでなく、先の三つの例はいずれも、心理療法で語られる言葉には見られる比喩表現であるが、論じられる時には三つの内、メタファと関連付けられることが多い。それは、心理療法における言葉を、実体のない心 (psyche) の表現であるとするならば、自然なことであるように思う。心理療法における言葉を理解する際に、心を想定して、その在り方を探る姿勢は、言葉を心のメタファとして理解している姿勢だと言えるのではないだろうか。この場合、先述の例一「人生は旅だ」だけが、メタファではなくなり、例二「雪のように白いうさぎ」(シミリー) や例三「永田町＝国会」(メトノミー) も、そしてそれだけでなく、心理療法における言葉全てが心のメタファとなりうると筆者は考える。人生と旅、雪とうさぎ、永田町と国会が比喩としてつなげられるだけではなく、心と言葉がつながる。ここで考えておかなければならないのは、心が想定されない場合の言葉は、心のメタファとはならないということである。至極当然のことを述べているようであるが、この「想定する」姿勢は、事例の読み方において決して小さくない役割を果たしていると思われる。そういう意味で、事例の読み方に通底する言葉は、メタファを事例の読み方の一つとして捉え、何のメタ

ファかという内容(言葉の元元に想定されたもの)と、どのような働きをしているかという機能に注目することによって、知見を得られるのではないだろうか。よって、メタファ論考の内、内容と働きについて比較的明確に述べられているもの三つを次に紹介し、三つの異同から、事例の読み方に通底する言葉を考えたい。

* * * * *

まず、クグラール⁽²⁾のメタファ理解を紹介しよう。クグラールは、ユングの言語連想検査の結果を提示しながら、イメージと言葉の関係の重要性を述べ、メタファは「元型イメージ・意味」を見通す、もしくは聴き通すための道だとしている。それは、言葉とその意味の組合せが恣意的なものであることを示し、意味が意味をなさない言葉の世界、音韻で言葉が分類される世界をくぐりぬけ、意味そのものとも言える「元型イメージ・意味」の世界をつなぐ道である。この場合、メタファによって表現される内容は、「元型イメージ・意味」であり、メタファの機能は、「元型イメージ・意味」と言葉とをつなぐこととされる。

クグラールのあげる具体例を補足すべく、日本語に見られる音韻で言葉が分類される例をあげよう。「花」と聞くと、人は花のイメージを思い起こし、求められれば、植物の種子を作る器

官の総称などとその辞書的な意味を答えることもできるだろうし、「きれいだ」「香りがいい」など、その人個人にとっての花の意味を答えることもできるだろう。これは言葉と意味がつながっている世界である。日本語で言う「花」を表わす言葉は、英語では flower、ドイツ語では die Blume というように各国で花を表わす単語は異なる。これは言葉そのものにはその意味をあらわす必然性が無いことを示している。ある水準の意識下では、意味と言葉のつながりが解体し、「花」と聞いて、「鼻」や「端」が連想される。これが、意味が意味をなさなくなる世界、言葉が音韻で分類される世界である。次に、この三つの「ハナ」は、一つは植物であり、また一つは人間の顔の一部であり、もう一つは物のはしであり、とまったく別のものである。一方で、音に共通点があり、ものの先端にある器官、もしくは単なる先端という共通点が見出せる。この共通点の存在が「元型イメージ・意味」の表れの一つだとされる。

この三層の世界の移動をクグラーは、ユングの行った言語連想検査結果で示した。刺激語を少なくない数、例えば二〇〇個提示することによって、後半の一〇〇個の刺激語への反応に注意の欠陥が生じ、前半の一〇〇個には多くみられた刺激語の意味内容に対する反応が、後半には音韻的な反応に変化することが報告された。例をあげると、carnation (カーネーション) という刺激語に対する、意味内容への連想反応は、flower (花)

であったり、blossom (開花する) であったりする。同じ carnation に対する音韻的反応は、reincarnation (輪廻転生) であったり、carnage (大虐殺・血) となりうる。この場合は、carn が音韻の共通パターンとなり他の言葉が連想されている。これは「カーネーションから血が落ちていることに気付いた」というある女子学生の夢理解に通じる例である。意味の次元からは一見意味のわからない、関連のなさそうな夢イメージ同士が、音韻でつながりを持つことに注目すること、つまり元型のメタファとして理解することで、夢へコミットし、魂の言葉を探求するのだ。こうすることで、イメージもしくは像としてのみ捉えられることがある元型理解に、形式的側面を強調する。そしてこのメタファ理解は、ユング(8)が「夢は隠さない、教える。(独) es verhielt nicht, sondern es lehrte.」と述べ拡充法で夢の言わんとすることを探索する姿勢にも通じるものであると思われる。クグラーが折に触れて述べているように、「元型イメージ・意味」があるから音韻パターンが等価になる。つまり、イメージの後に言葉が成立するという、イメージと言葉の関係がクグラーのメタファ理解である。

* * * *

次に、妙木のメタファ理解に移ろう。妙木(9)は、メタファ

の内容を治療関係に帰着しうるものが表現されていると促えている。そして、クライエントの言葉もしくは語りを転移解釈につなげる橋渡しの機能をもつものだとする。メタファによって表現される内容は治療関係である。そして、「今ここ」の治療関係でメタファを用いて転移解釈を投与していくことの重要性を述べている。ここではメタファは、限りなく治療関係、転移に近い。「発見的メタファ (heuristic metaphor)」と呼ばれるこのメタファ理解の例として、女性のクライエントと男性の治療者のやり取りが紹介されているので見てみよう。

クライエント「人間は信用できません。みな狼です。」

治療者「あなたの言う人間は、男のことですね。狼は男だと言ってるんだ。」

クライエント「そうですね男は狼です、信用できません。」

治療者「じゃ、そこで言う男にはかなり性的な意味も含まれているの。」

ここでは「人間は狼である」という、「人間」という言葉と「狼」という言葉の意味に相互に影響を与え、人間は信頼できないということの意味する、人間不信の発言を、治療者が「人間＝男」という指示対象を特定化して解釈し、「男は狼である」という発言によって、クライエントの内の「男性」という言葉と「狼」という言葉の意味を相互

に変えている。そうすることでクライエントの無意識にある考えは実は性的な発言であったことに光を照らしているのである。そしてその後、治療者が男であり、私に對しても同じような信用できなさを語っているということが発見されて、にもかかわらず、治療室の中でそれが取り扱われ続けているということが大切なのだ。

この治療室の中で、重要な治療的体験を伴うようなメタファを「発見的メタファ」と呼ぶことにしよう。

ここでのメタファは、治療関係の中で、過去の体験と今この体験、空想と現実、身体機能と観念機能などをつなぎ、生々しい実感を伴いながら、新たな意味を生む橋渡し機能を持つものとして論じられている。この、あくまでも、治療関係に帰する姿勢は、妙木のフロイトの理論語「 \mathcal{E} 」の理解にも透徹して見られる。治療関係を理解する上で、よい補足となると思われるので、妙木の専門用語と日常語としての「 \mathcal{E} 」理解も紹介したい。

まず、専門用語としての「 \mathcal{E} 」は、リビドーのエネルギーを貯蔵し、心の欲動内容を保つ精神装置の一部である。そして、発生論的に見ると、自我と超自我という心の構造と、その構造の結果生じる葛藤の基礎を作る。「 \mathcal{E} 」は「 \mathcal{E} 」としか言いようのないものだと言われている。この概念の背景には、心理的な

個体主義モデル（人間の心を単体で見えていく見方）と直線的な発達モデル（個人の経験が歴史としてつもりつもって現在の個人があるとする見方）がある。そして、日常語としての「es」は、言うまでもなく代名詞であり仮主語であるのだが、「es」と言う時の対象との距離というニュアンスに注目することが提唱される。何かをさす時の「これ」でもなく「あれ」でもない会話の中での「それ(es)」は「これ」と「あれ」の両者を指しつつ、そのどちらとも少し距離をとるような緩衝帯、もしくは橋のような役割を果たして、交流する会話の橋渡しを行っていると考え、これをフロイトが無意識的に期待していたのだろうと妙木は推測する。具体例として挙がっているのは、「病気の原因は、あれこれと考えて迷ってしまうことにあります。それが問題です」とか「それをそのままにしておけることもまた重要な対処法です」といった言葉の中の「それ」が橋渡しの「それ」である。理論語としての「es」の具体例は、「彼はエスというものによって動かされている」とか「心のなかにある子どもの部分、エスが強く動いている、自我を圧倒している」とか、「衝動、つまりエスを抑圧した結果です」といった用いられ方をする。

交流する会話の橋渡しとしての「es」の説明に、距離をとるような緩衝帯、もしくは橋のような役割とされているのは、メタファのつなぐ機能を考える際にも大切になるであろう点を含む

んでいると思う。この点については、次に紹介する樋口のメタファ理解で詳しく述べたい。

* * * *

樋口⁽¹⁰⁾にとつてのメタファで表現される内容は、虐待などの体験であり、その体験から「間合い」をとって表現するという機能がある。プレイセラピーでの言葉を、クライエントがそれまでに体験してきた虐待などの事実が遊びを通して「間合い」をとって表現されるためのメタファとして理解することの重要性を述べている。そして、セラピストがその間合いを理解した上で、同じく間合いをとりながら、メタファで応じることの必要性も述べられている。これは弘中⁽¹¹⁾が、心理療法の場で発せられる言葉を、現実が投影された何かとして捉え「メタファにメタファで応える」ことの治療的意義を述べていることを受けてのことであるが、樋口の言うメタファを用いた応答では、「間合い」が大きな役割を果たす。メタファ的応答の「間合い」の機能は、児童養護施設における被虐待児が自身の生育歴そのものから少し距離をとった、より守られた形で読みなおし、再構成をし、自身の物語として位置付けるために必要なものとして論じられている。これは、何かと何かをつなげることが強調されるメタファの、重要なもう一つの機能であると筆者は思う。

何かと何かがつながるためには、その何かと何かは別々の切れた存在であることが前提になる。もともと一つであるものは、それ自身とつながる必要がないからだ¹⁷⁾。

実際、樋口の事例報告よりうかがえるプレイセラピーにおけるメタファのやりとりは、「間合い」のある返答で、クライエントのその時々状態にとっても繊細に応対されており、読み手の胸を打つ場面が多々報告されている。例えば医師をクライエントが、患者の母親をセラピストが演じる場面での、医師の言葉を母親が絶妙な間合いを持って受け止める場面などがそうである。事例経過はメタファのやりとりを基礎に置きながら、家族の再統合に向けて、クライエント、親、施設職員それぞれが持つ課題を明らかにするという方向で紆余曲折をみながらも進んでいった。

メタファ理解の相違点と共通点について

以上、クグラー、妙木、樋口のメタファ理解を概観した。クグラーは「元型イメージ・意味」のメタファとしての言葉について、妙木は面接室内での治療関係にみる発見的メタファを、樋口はクライエントの現実での体験をプレイセラピーにおいてメタファだと捉える視点について述べていた。相違点は、セラピストが面接における言葉をメタファとして理解する際の立ち

位置、もしくは注目する層の違いであると言えるだろう。すなわち、深層のイメージ・今ここの関係・過去の体験である。これは、今回の調査研究での、ことばグループの言葉理解の不一致が、同じく注目する層の違いによるものであったということ、言葉理解の内の一つであるメタファの考察結果という部分から、言葉理解全体を類推する、もしくは俯瞰する視点を得るという意味での補足説明にもなるだろうし、メタファがそれだけ心理療法に即した働きをするということにもなるだろう。では、心理療法における言葉の機能の一つとしてのメタファを事例の読み方の一つとして本論で扱う意義はどこにあるのだろうか。それは、メタファ理解の相違点の中に共通点を見出し、事例の読み方に通底する言葉を探すことにある。

三つのメタファ理解の共通点は何であろうか。それは「探索的に言葉を見出そうとする姿勢」とその結果見出された「関係」だと筆者は考える。「探索的に言葉を見出そうとする姿勢」とは、クグラーの言う「見通す」姿勢、妙木の言う「発見的にメタファを用いる」姿勢、樋口の言う「メタファ的応答を創り出す」姿勢である。

クグラーは、言葉の意味が意味をなさない世界をくぐり、見通して、「元型イメージ・意味」と言葉を結びつけるべくメタファを用いる。妙木はクライエントの言葉を治療関係に結び付けるべく、セラピスト・クライエント間のやりとりを発見的メ

タファとして用いる。そして樋口はクライエントが体験から問合いをとりながら自分の体験を扱うという意味でメタファを用いる。樋口の言うメタファ機能は、前の二つが「結びつける」機能に注目していたのとは逆に、「間合い」をとる機能に注目している。「結びつける」と「間合い」をとるは、「つなぐ」「切る」と言いかえることもできよう。今回引用した三つのメタファ理解に見られた「つなぐ」と「切る」は相対する機能ではあるが、そこには「関係」という共通点も見いだせるのだ。ここで更に樋口論文について考えたいことがある。それは、プレイセラピーでのやりとりがメタファと位置付けられた理由についてである。先に述べたように、クライエントの体験が「間合い」をとられた形で応対される意義が大きいのは繰り返すまでもないが、もう一つの意義は、養護施設でのプレイセラピーを、家族再統合を視野に入れた、生活担当職員と心理士との連携の中に位置づけることにあるのではないだろうか。つまり、通常は外部に説明する機会を得ないプレイセラピーでのやりとりを、専門の異なる職員に伝える必要がある場合に、メタファだと位置づけ、説明することで理解を得るという意味があるように思われるのだ。ここでのメタファは、クライエントの体験と言葉、セラピストの理解と言葉という面接室内の関係だけでなく、家族や施設職員、ひいては国の制度等の外部との関係をつないだり、各々の役割分担を明確にし、相互理解を育む

機能がある。この点を考慮すると、他業種との連携という「関係」が見えても来る。これもまた、医療分野や教育分野、産業分野、福祉分野等、他業種との連携が前提となる場で行われている心理療法をとりまく現状を反映したメタファ理解の内の一つだと思われる。

以上、メタファ理解に見る事例の読み方の相違点と共通点を見てきた。今回たどりついた「関係」という言葉は、還元的ではなく探索的に言葉を見出す動的な姿勢、弁証法的に止揚された言葉を探す姿勢をもった結果見いだされた。「関係」は事例の読み方に通底する言葉である。そして、この「関係」が唯一無二の通底する言葉なのではなく、繰り返し言葉を探していくことが何をもつて心理療法とされているかという問いへの答えなのではないだろうか。

註

(1) 河合隼雄「イメージと言語」「イメージの心理学」青土社、一九九一年、一八二―一九九頁。

(2) 日本心理臨床学会 基礎調査研究「見立て」の内実についての研究「事例の読み方に関する研究——若手臨床家の読みの視点が生産されるプロセスに注目して——」「事例におけるセラピストの『判断』とその基準をめぐって——若手臨床家の行動化・身

- 体化に対する記述データから——」、自主シンポジウム「学校での個人面接過程で依頼される家庭訪問——若手臨床家の事例の読み方から心理臨床的視点をさぐる——」、ポスターセッション「スクールカウンセラー（SC）の専門的判断に関する一考察——イレギュラーな要望にSCとして何を感じ、どう対処していくのか——」「心理療法における描画法の導入について——若手臨床家は何を根拠に判断するのか——」「夢の報告と描画法を同一面接内で扱うことにおける若手臨床家の臨床的感覚」『第二九回大会発表論文集』東北大学、二〇一〇年。
- (3) 甲南大学人間科学研究所 共同研究プロジェクト 穂苅千恵企画「心理療法の現在に関する検証」若手臨床家の事例の読み方に関する調査中間報告二〇一〇年。
- (4) ことはグループメンバー・明石加代、長野真奈、甲斐咲子、南部勝彦、倉本幹子、地蔵原奈美、廣部愛美。
- (5) 田中一彦「メタファーの心理」田中一彦編『現代のエスプリメタファーの心理』第二八六巻、一九九一年、九一—四頁。
- (6) 高橋英光『言葉のしくみ——認知言語学のはなし』北海道大学出版会、二〇一〇年、八七一—〇八頁。
- (7) Kugler, P., *The Alchemy of Discourse An Archetypal Approach to Language*, Associated University Presses, 1982, 森岡正芳訳『言葉の錬金術 元型言語学の試み』どうぶつ社、一九九七年。
- (8) Jung, C. G., *Allgemeine Gesichtspunkte zur Psychologie des Traumes in "Die Dynamik des Unbewussten"* G. W. 8., Patmos, 1916/1967, par. 471
- (9) 妙木浩之『精神分析における言葉の活用』金剛出版、二〇〇五年。
- (10) 樋口亜瑞佐「ブレイセラピーにおける言葉のメタファの観点からの一考察」『心理臨床学研究』第二六巻・第二号、二〇〇八年、一二九—一三九頁。
- (11) 弘中正美『遊戯療法と子どもの心的世界』金剛出版、二〇〇二年。
- (12) 長野真奈「心理療法で報告された終結夢の理解をめぐって」『甲南大学紀要 文学編』第一六〇巻、二〇一〇年、一四九—二五六頁。

(ながの まな／臨床心理学)